

精子が間違えず 卵探す方法解明

筑波大下田臨海センター

精子が間違えずに卵の方向を目指して泳ぐ仕組みを、下田市の筑波大下田臨海実験センターなどのチームがホヤを使った実験で解明したと19日付の米アカ

デミー紀要電子版に発表した。

新たな生命の誕生につながる受精に欠かせない仕組み。

人にも応用できる可能性があり、同センターの稲葉一男教授は「不妊治療や避妊剤の開発に応用できるかもしれない」としている。

チームによると、ホヤの卵子は自分がある場所を知らせる「誘引物質」を海水中に放出している。精子が卵の

方向に向いて泳いでいると、この物質の濃度が薄まってしまふ。精子がそれを感じると動力源であるペルモで「カラクシン」というタンパク質が働いて直進ができなくなり、方向転換を始めることが分かった。

卵のある方向を向くとまた直進ができるようになるという。実験でカラクシンの働きを抑えると、精子は秩序だった動きができなくなり、卵にも到達できなかった。

「精子が間違えずに卵の方向を目指して泳ぐ仕組みを、下田市の筑波大下田臨海実験センターなどのチームがホヤを使った実験で解明したと19日付の米アカ

デミー紀要電子版に発表した。

新たな生命の誕生につながる受精に欠かせない仕組み。

人にも応用できる可能性があり、同センターの稲葉一男教授は「不妊治療や避妊剤の開発に応用できるかもしれない」としている。

チームによると、ホヤの卵子は自分がある場所を知らせる「誘引物質」を海水中に放出している。精子が卵の

方向に向いて泳いでいると、この物質の濃度が薄まってしまふ。精子がそれを感じると動力源であるペルモで「カラクシン」というタンパク質が働いて直進ができなくなり、方向転換を始めることが分かった。

卵のある方向を向くとまた直進ができるようになるという。実験でカラクシンの働きを抑えると、精子は秩序だった動きができなくなり、卵にも到達できなかった。